慶長十年再建の相国寺法堂について

THE RECONSTRUCTED HATTO OF SHOKOKU-JI OF 1605

木村展子*
Nobuko KIMURA

The hatto of Shokoku-ji reconstructed by Hideyori in 1605 is of the utmost historical importance being the oldest and largest extant example of its type. Despite a shortage of lumber and various problems involving logistics, the building was completed in one year and became the exemplary model of subsequent hatto architecture. Its success as an architectural design lies in the fact that it was both large enough for the performance of religious rituals and rationally determined so that unnecessary elements were eliminated (i.e. it was both functional and economically efficient.) As a result, it came to represent a new kind of internal space.

Keywords: *Shokoku-ji, hatto, Toyotomi Hideyori, Zen, Momoyama era*

相国寺, 法堂, 豊臣秀頼, 禅宗, 桃山時代

はじめに

相国寺は臨済宗相国寺派の大本山で、足利義満が永徳二年(1382)に創建し京五山の第二位に位置した名利として有名である。創建当時は仏殿・法堂・三門などはもちろんのこと七重大塔をも備える大伽藍を持ち、数多くの塔頭を抱えていた。しかし、その後数度にわたる火災によって、現在は堂宇もわずかとなり寺地も大幅に減少している。そのようななか法堂は現存する法堂の中で最古かつ最大の法堂として唯一重要文化財に指定されている。この法堂は慶長十年(1605)に豊臣秀頼が再興したもので近年修理工事が行われた¹⁾。また、秀頼は翌慶長十一年(1606)にも南禅寺法堂を再建している。秀頼は慶長三年より100近い寺社の造営を行っているが、この2棟はそれの中でも規模の大きな建築であり、さらに最も作事の集中した時期に造営されている²⁾。

一方、鎌倉・南北朝時代の五山建築に関しては横山秀哉氏、太田博太郎氏、川上貢氏、関口欣也氏、永井規男氏などによる詳細な論考があるが³⁾、五山寺院は中世に度重なる火災に遭い、室町後期における詳しい状況はわかっていない。近世に入って禅宗寺院の多くが復興されるが、鎌倉・南北朝時代の五山建築とは構造形式が大きく異なっていることは周知であろう。すなわち法堂においては身舎梁間が三間から四間になり、立断面では2階建てから裳階付となっ

ている。また、三門、仏殿、法堂ともに内部身舎天井を全面鏡天井とし、梁組を露出しない。相国寺は現存する最古の法堂として、室町後期の法堂を考える上でも、その後の江戸時代における法堂の展開を考える上でも非常に重要な建築だといえることができる。

相国寺法堂は造営に関する文書等が残っておらず、詳しい造営経過などは判明していない。しかし、翌年に造営された南禅寺法堂は現存こそしないが、わずかながら造営に関する文書や記録の類が残っている。それらを参考にしながら慶長十年の相国寺法堂の造営事情を明らかにし、さらにその検討作業を通して相国寺法堂の建築的意義を考察したい。

1. 歴史と現状

1-1. 中心伽藍の変遷

まず、法堂、仏殿、三門を中心に、創建当初からの中心伽藍の変遷について概観する(表1)。

永徳二年(1382)十月、足利義満の発願により相国寺が建立される⁴⁾。開山には春屋妙葩が招請されたが、春屋は夢窓疎石を勧請して開山とし自らは第二世住持となった。十一月には法堂、仏殿の立柱上棟が同時に行われる。至徳元年(1384)三月には「大仏殿」の立柱が行われこの年に完成している。至徳三年(1385)には三門が立柱

* 神戸大学大学院文化科学研究科 助手・学博

Research Assoc., Graduate School of Humanities and Social Sciences, Kobe University, Ph.D.

表1 相国寺法堂・仏殿・三門
造営年表

	1350	1400	1450	1500	1550	1600	1650	1700	1750	1800	現在
法堂	91 落成	92 落慶	93 竣工	94 全焼	95 上棟、 87頃竣工	96 落慶					
仏殿	84 竣工	85 落慶	25 立柱								
三門	85 上棟	87 落慶	40 竣工か			86 立柱				88 焼失	
		94 全焼	25 焼失	67 全焼 (応仁の乱)							

上棟、明徳二年(1391)には法堂(法雷堂)が落成する⁵。こうして次々寺観も整い、翌明徳三年には義満を迎えて総供養が行われる。仏殿が2度立柱されているのは2棟建てられたのではなく、より規模を大きくしての造営途中での設計変更だったのであろう。こうして約10年かけて広大な伽藍が築かれたが、総供養を行ったわずか2年後の応永元年(1394)九月二四日に直歳(しっすい)寮より出火し、伽藍は焼失してしまう。同年十一月にまず仮設の仏殿と山門の立柱が行われ、翌応永二年二月四日には本格的な仏殿(三世如来大殿)の立柱が行われる。応永三年(1396)四月二日には法堂の立柱、六月二十三日には仏殿が落成、七月十日には三門の立柱と、義満の庇護の下、再建は急ピッチで行われた⁷。ただ法堂と三門の造営には時間を要し、法堂は応永八年(1401)に竣工したようである⁸。一方三門はさらに時間を要し、応永十四年六月二十一日に竣工している。ところが、応永三十二年(1425)八月再び火災にあってしまう⁹。乗仏の際に輪蔵を法堂として用いているので、法堂も焼失したのであろう¹⁰。仏殿ははやくも同年十一月に立柱が行われる¹¹。永享七年(1435)八月には僧堂の立柱上棟、十月には三門の立柱が行われる。法堂の着手は遅れて永享九年四月に立柱、翌年の四月に落成する。三門はさらに遅れて永享十二年(1440)に竣工する¹²。しかし、このあと応仁元年には「十月初三日卯刻、敵軍攻寺、從庫堂出火、七堂并東方諸院・六鹿苑一時為焦土、同四日午刻、西方諸院、始于雲頂、終于大徳、皆毀兵矣」と中心伽藍はもちろんのこと塔頭寺院まで全焼する¹³。

応仁の乱は十年余続き、文明十年(1478)に至ってようやく法堂の上棟が行われ、伽藍の再建が始まる¹⁴。しかし、文明十一年に再び火災に遭うなど工事はなかなか進展しなかった¹⁵。いつ頃竣工したのかは明らかではないが、文明十七年(1485)には横川景三が住持として入山し上堂説法を行っているので¹⁶、この頃までには少なくとも法堂(無畏堂¹⁷)は完成していた。しかし、三門は文明十七年の横川景三の再住時にはまだなく¹⁸、その後も再建されたとは考えにくい¹⁹。また、仏殿は再興されなかったようで、延徳二年(1490)正月二十三日に亀泉集證が將軍義視の質問に答えて「仮法堂一宇有之、仏殿亦用之」と述べているように²⁰、法堂が仏殿を兼ねていたようである。明応四年(1495)になっても、景徐周麟が提綱略で「雖然仏未設殿僧未設堂」と述べているように、仏殿ばかりでなく僧堂もなかったようである。そして、その状態はずっと続き、天文二十年(1551)七月十四日に兵火によって火災に遭う²¹。法堂は焼失を免れるが²²伽藍の荒廃は免れず、再興が企図されるが果たせぬままであった²³。天正十二年(1584)、住持となった西笑承兌が中心とな

って再興を図り、慶長十年(1605)豊臣秀頼によって法堂(無畏堂)が再建され、続いて翌慶長十一年(1606)には徳川家康によって三門が再建される。しかし、天明八年(1788)正月の大火によってほとんどの堂宇が焼失してしまう²⁴。中心伽藍が残ったのは勅使門と法堂のみであった²⁵。文化四年(1807)に方丈、庫裏、開山塔が、天保十四年(1843)に鐘樓が再建されるが、寺勢の衰えは避けることができなかった。

1-2. 構造形式

構造形式は桁行五間梁間四間の一重裳階付の入母屋造で、堂内は四半瓦敷で中央に須弥壇を設け須弥壇上後方には本尊を安置する。天井は身舎部分には板天井を張り裳階部分は化粧屋根裏とする。なお、身舎の天井部分には狩野光信による「蟠龍図」が描かれている²⁶。

小屋組は梁間に二通りの大梁をかけ、桁行梁は三通り入れ大梁上で繋ぎ、柱を立てず堂内を広い空間とする。堂内には身舎柱が林立するが、主に北側の柱にはゆがんだ柱が目立つ。

須弥壇は当初から設けられていて、本尊の釈迦如来と迦葉、阿難尊者が安置されている。須弥壇背面後壇には普庵禪師の位牌を安置する。裳階背面の東脇壇には、足利義満、大権修理菩薩、西脇壇には百丈、臨濟、夢窓、達磨像と歴代住職の位牌を安置する。本来法堂は住持が上堂説法する場であり須弥壇ではなく法座とすることから、相国寺法堂は当初から仏殿との兼用を前提に建てられたものであることがわかる。

現存している五山および同程度の規模を持つ臨濟宗寺院の法堂には次のようなものがある。(天龍寺法堂は僧堂を移築したものなので除外した)

大徳寺法堂	寛永十三年(1636)	桁行五間・梁間四間
妙心寺法堂	明暦二年(1656)	桁行五間・梁間四間
建仁寺法堂	明和二年(1765)	桁行五間・梁間四間 ²⁷
建長寺法堂	文化十一年(1824)	桁行三間・梁間三間

全て一重裳階付の入母屋造であり、いずれも相国寺と同様、堂内は四半瓦敷で天井は身舎部分には板天井を張り裳階部分は化粧屋根裏とする。また、相国寺の翌年に建てられた南禅寺法堂は、川上貢氏が紹介された正徳五年(1715)の「見分間数改帳」²⁸によると、「十間×七・五間、四方雨打一・五間宛」と相国寺の「十四間×十三間」よりやや規模が小さいものの、やはり一重裳階付で、なおかつ狩野孝信の蟠龍図が天井に描かれていたというから²⁹身舎部分は鏡天井であったに違いない。以上のように相国寺法堂以降は一重

裳階付・身舎全面鏡天井という形式を踏襲している。

2. 造営事情

2-1. 造営経過

1-1で示したように、現在の法堂は創建以来5回目の造営になるものである。その造営経過について考察する。

室町後期には、京都の禅宗寺院はいずれも戦乱によってすっかり疲弊していた上に、後ろ盾であった足利幕府の勢力も衰え、堂宇すら満足に造営できない状況が続いていた。そのような中で登場した豊臣家という巨大な権力は、彼らにとって利用価値の大きいものであったに違いない。同時に、彼らの中国に対する深い素養は豊臣秀吉の対大陸政策になくてはならないものであった。特に相国寺長老の西笑承兌は秀吉と近しく、秀吉の対外政策に深く関わっていたが³⁰、その西笑承兌を中心に豊臣家に対する伽藍再興の働きかけが行われた。まず、西笑承兌は秀吉に造営の願を出していたようで、天正十七年に前田玄以が破壊された塔頭を見て回っている³¹。しかし、秀吉は方広寺大仏殿を造営する間、他の寺社の造営を禁止した³²。結局、法堂は秀吉の死後、秀頼によって慶長九年(1604)に着工され、同年十一月十四日に立柱³³、翌慶長十年(1605)十月八日に落慶法要が行われた。造営決定に至った詳しい事情は定かではないが、『慶長日件録』慶長十年五月十九日の条には「相国寺法堂見物、過半出来、柱等奇麗驚目畢、近日又鐘樓出来云々、豊光寺当代依為帰依僧、寺院繁盛異他寺者也」と記され、造営の途中の様子がうかがわれる。そして、十月八日に落慶法要が行われるがたいへん盛大なものであった³⁴。

このように秀頼による法堂の造営は1年で竣工したが、翌年の南禅寺法堂も同様であった。南禅寺も応仁の乱により堂宇は灰燼に帰したが、文明十一年(1479)に法堂が再建された³⁵。やはり仏殿は建てられなかったようで法堂が仏殿を兼ねていたと考えられる³⁶。しばらくその状態が続くが、相国寺の西笑承兌と共に秀吉の対外政策に深く関わった南禅寺長老の玄圃霊三により、慶長九年(1604)九月に造営の願いが片桐貞隆を通して秀頼にだされ、十月には造営決定の報が伝えられている³⁷。そして慶長十年(1605)七月末に着工、翌慶長十一年七月五日に落慶法要が営まれている³⁸。

この他近世初期の京五山の各寺院では、応仁の乱以降荒廃していた伽藍の整備が行われている。まず、相国寺では法堂に続いて三門が徳川家康によって再興される。慶長十年九月二十八日に材木の調達を始め、翌慶長十一年二月十五日に立柱を行っている³⁹。落慶法要は慶長十四年四月三日である。ただしこの三門は天明八年(1788)の大火で焼失し現存していない⁴⁰。また、南禅寺は古い三門があったが⁴¹、寛永五年(1628)に藤堂高虎の寄進で建て替えている。一月二十七日に着工、六月二日に立柱⁴²、九月十五日に落慶供養を行っている⁴³。天竜寺は、応仁の乱で法堂・仏殿共に焼失した後、慶長三年(1598)に法堂を再建している⁴⁴。建仁寺は、天文二十一年(1522)の兵火で法堂・仏殿ともに焼失したが、安国寺恵瓊が東福寺の茶堂を移築して仏殿としている⁴⁵。なお、東福寺は洛中から離れたところに位置しているということもあって、応仁の乱では焼失せず南北朝時代の伽藍が残っていた⁴⁶。

しかし、このあと武家などからの寄進はなく、寛永十一年(1634)に家光が上洛した折に、五山はそれぞれ欠いている堂宇の再

建を願い出るがかなわなかった⁴⁷。それぞれ願い出た堂宇は、南禅寺が仏殿、天龍寺が三門、相国寺が仏殿、建仁寺が三門、東福寺は「七堂并開山堂御修復」であったが、いずれの堂宇も江戸時代には再興されることはなかった。

2-2. 材木事情

修理工事報告書によると、身舎柱18本のうち檜が16本、樺が2本である。長さは27.77尺から27.90尺までであるが、「長さに余裕がなかったのか、先細りの柱が多く、18本のうち柱頂部が頭継されていたり運搬穴が埋木されていた」という。

相国寺法堂作事における材木事情について書かれた記録類は無いが、南禅寺法堂作事に関しては、片桐且元から南禅寺の金地院崇伝へ送った次のような書状がある⁴⁸。

態令申候、法塔材木之儀、大坂中其外方々相尋候へ共、四間四尺之柱と大引物少不足二候、詔候へハ来年五月ならてハ参間敷由候間、少不足之分ハ堪忍候て、当年相立可然と存尋申候へハ、四間式尺迄之木ハ有之事候条、(後略)

大坂には四間四尺の柱がなく、調えようと思うと来年五月になるので、今ある四間二尺の柱で建ててはどうか、と進言しているのである。一間を6尺とすると28尺の柱はないが26尺の柱であれば大坂にあるということになる。一間を6.5尺としても30尺の柱はないが28尺の柱であれば大坂にあるということになり、当時の豊臣家の資材の所有状況を示している。おそらくこの書状は着工される寸前の慶長十年に書かれたものであり、相国寺法堂の身舎柱の状態を裏付けるものである。

この慶長十、十一年というのは秀頼の100近い寺社造営のなかでも最も作事が集中した時期である⁴⁹。そのうち慶長十年(1605)十一月十七日に再興された醍醐寺西大門の場合には、慶長八年(1603)二月に片桐且元に造営の願いを申請し、慶長十年七月に再興が決定する⁵⁰。七月二十二日には材木が注文され、八月十三日新始、その後礎石探しにやや手間取ったようで十月十二日礎突、同二十一日立柱となるが、山上伽藍と同様「大坂ニテ悉木作了」であった。材木は多くが檜であるが、柱は翌年の春まで待たないと檜が用意できず樺になったという⁵¹。相次ぐ作事で材木が不足していたことがうかがえる。

もともと材木不足は豊臣家に限ったことではなかった。慶長十一年(1606)に相国寺三門が建てられた事は前述したが、このときも五間の柱を希望したがなかなか手に入らず、慶長十年中の立柱は断念している⁵²。南禅寺三門もどの程度の材木を用いたかは明らかでないが、『本光国師日記』によると藤堂高虎が三門造営をすることを申し出たのは寛永三年四月二日のことであるが⁵³、高虎の南禅寺に宛てた書状によると材木が初めに南禅寺に届いたのは寛永四年五月である⁵⁴。さらにその後も少しずつ送り届けられ、材木の過半が届くのはやっと十二月になってからである⁵⁵。つまり材木の調達に7ヶ月を費やしたことがわかる。禅宗の中心伽藍は中世より小さくなったとは言うものの⁵⁶、やはりいずれも規模が大きく、材木の調達には苦勞が伴ったことがうかがわれる。

秀頼が慶長十四年以降、方広寺以外の寺社造営をほとんど行わなくなるのは、政治上の理由もさることながら⁵⁷、この材木不足も大きな要因であったと考えられる⁵⁸。

2-3. 高野衆と造営料

相国寺法堂の造営に関する文書は残っていないが、『鹿苑日録』慶長九年十一月十四日の条に「同途シテ赴法堂、見柱立、文殊院於円光門外相逢、十一本見相立、」、慶長十年四月八日の条に「其内高野法堂奉行僧衆・少年福千代ト云少年酒半来・・・」とあり、文殊院勢譽をはじめとする高野衆が相国寺法堂の作事に関わっていたことがわかる。秀頼が造営した寺社のうち高野衆に関わっていたことが明らかなのは、慶長四年(1599)の豊国廟、慶長五年(1600)の方広寺と醍醐寺金堂、三十三間堂、慶長八年(1603)の東寺金堂、慶長十年(1605)の東寺東大門、南大門、慶長十一年(1606)の南禅寺法堂である⁵⁹。慶長五年、関が原の戦いの後木食応其は隠遁するが、東寺は真言宗の寺院であり文殊院勢譽がその作事に関わったのは特に不思議ではない。しかし、相国寺と南禅寺の法堂作事に関わっていることは注目すべきである。南禅寺法堂の作事でも、材木の選定等の中心となっていたのは寺家大工の清左衛門であるが、片桐且元が材木についての相談をするなど、ここでも文殊院勢譽が関与している⁶⁰。

ところで相国寺法堂の再建には豊臣家から一万五千石の寄進があったことが判明しているが、この金額を秀吉・秀頼の他の造営寺社と比較する。

相国寺法堂	15,000 石
青巖渡寺(全堂宇)	10,000 石
津島神社南門	500 石
醍醐寺山上伽藍(3棟)	10,000 石
西宮神社	1,072 石
箕面寺本堂	733 石
勝尾寺本堂	664 石

方広寺大仏殿(天正度) 83,000 石(供養の費用を含む)

天正度方広寺大仏殿は別格にすると相国寺法堂の造営料の多さがわかる。つまり相国寺法堂作事では特に建築経営の手腕が求められたのである。高野衆は方広寺を初めとする数々の大建築を造営してきている。相国寺法堂も南禅寺法堂も疲弊しきった京五山寺院はもちろんのこと、豊臣家の奉行・大工衆だけでは作事を行うことができなかったのではないかと。

関が原合戦までは五奉行の一人で公家・社寺を管轄していた前田玄以と応其の間に、前田玄以一木食応其という関係が確かに存在していた。前田玄以が総奉行、木食応其が作事奉行、その下に下奉行として高野衆たちがおり、木食応其の圧倒的な組織力と建築経営能力によって、秀吉の寺社に関する作事組織は機能していた⁶¹。そしておそらくは、技術的には応其がつれてきた大仏大工たちが主導していた。方広寺をはじめとする秀吉の作事では「動員力を誇る軍事的な生産組織と、寺院の持つ伝統的な生産組織とが一体化」し⁶²、豊国廟作事など秀吉の死後もしくはは継承するが、応其の隠遁で終焉を迎える。関が原合戦後、片桐且元が江戸幕府の摂河泉の国奉行となるとともに、豊臣家の家老として豊臣家の作事の多くを統括するが、片桐且元一文殊院勢譽という関係は明確ではない。結局、秀吉に「木食の高野」と言わせたほどの、天正十三年(1585)の高野攻め以来続いた秀吉と応其の密接な関係に代わるものを形成しえず、秀吉の寺社造営において機能した作事組織は解体してしまうのである。そこには、一山を支配した応其とは異なり、文殊院勢譽の高野

山支配が順調ではなかったこともあったと思われる⁶³。しかし、「伝統的な生産組織」である高野衆に依存している限り、中世的な組織から脱却できないのであり、脱却するためには「秀頼様大工」達、すなわち応其が連れてきた大仏大工の源左衛門や法隆寺大工で豊臣家の「御大工」となった藤右衛門、薬師寺大工であった喜多越後守清次などが、秀頼配下の諸職人を一元的な縦の組織として再編し、同時に寺社大工も含めた工匠の動員管理や工費監理などもする武家御大工へ変質しなければならなかった。しかしそれは徳川家御大工の中井正清にしかなしえなかったのである⁶⁴。このように、技術的問題よりも秀頼の作事組織の運営的側面における管理者の不在が、相国寺と南禅寺の法堂作事において文殊院勢譽を必要としたのであり、それこそが秀頼の作事組織の限界だったのである。

3. 相国寺法堂の建築的意義

3-1. 造営工匠と指図

修理工事報告書によると、棧唐戸に「此ハツタウツカマツリソロウ王物大仏ノ大工ナリ源左衛門タウリヤウナリ」という墨書があり、造営に携わった工匠は大仏大工の源左衛門であることがわかる。源左衛門は秀頼御大工のひとりであり、醍醐寺の山上伽藍の作事に従事している⁶⁵。この源左衛門が、方広寺作事の際に木食応其が紀伊と大和からそれぞれ 10 人ずつ連れてきた、いわゆる「大仏大工」であることは醍醐寺座主の義演も『義演准后日記』に記しており⁶⁶、当時源左衛門が大仏大工であったことは広く知られていた。また、続く「ウチキモイリタンハラヤー郎ナリジワリヲハラヤー郎ツカマツリソロコモノハテコロワヤマトウチノカウリヨリテマウシソロ慶長十年六月廿三日」⁶⁷よりこの墨書を記したのは源左衛門配下の「肝煎」大工の「や一郎」であったようであるが、その出身が大和宇智郡丹原(現在の奈良県五條市)であると記すことから、源左衛門の出自も大和であった可能性は高い。宇智郡の池の修復を応其が行なっていることから⁶⁸、その際にかかわりをもったのかもしれない。

ところで、豊臣秀頼が費用を下行し、奉行も派遣した 100 件近い作事を寺家・社家大工の関わり方からみると、大工や諸職人も派遣して作事を行う場合(A方式)と、寺家大工や地元の大工が主体となって作事を行う場合(B方式)の2種類に分類する事ができる⁶⁹。この相国寺法堂の作事は「地割図」の作成を「や一郎」が行っていることから、豊臣側大工が主体的に作事に参加するA方式であったことがわかる。なお源左衛門は翌慶長十一年の醍醐寺山上伽藍の作事でも開山堂・五大堂・如意輪堂すべての地割を行っている。醍醐寺山上伽藍もA方式であったが、指図は「山上学侶」が大坂へ持っていつている。また、同じくA方式の北野天満宮の作事(慶長十二年)でも指図は松梅院が自ら書付けている⁷⁰。様々な宗教行事の行なわれる建造物では機能的な側面は非常に重要であり、醍醐寺と北野天満宮の場合は機能に深く関わる平面計画は寺家、社家側が行っていた。相国寺でも墨書にわざわざ記していることを考えると、豊臣側は地割のみを行った可能性が高い。そうであれば平面計画は相国寺側、立断面計画は豊臣側が行ったことになる。

3-2. 平面と立面について

建長寺や東福寺の法堂は、鎌倉時代には大規模な重層建築であ

った事が判明している⁷¹。しかし、前述したように五山寺院はその後何度も再建が繰り返され、法堂がどのような形式の変遷をたどったのかは明らかではなく、正長元年(1428)に再建された東福寺法堂が裳階のつかない単層であることが判明している以外、室町時代に建立された法堂の立面は全く判明していない。また中世の平面が判明している五山の法堂は、創建以来 2 度目の造営となる嘉暦二年(1327)の建長寺、正長元年の東福寺、応仁以前と思われる天龍寺だけであるが、いずれも身舎は桁行五間、梁間三間である。

室町後期になると、京五山では多くの堂宇が応仁の乱で焼失し、建仁寺のように応仁の乱で焼け残ってもその後の天文の乱で焼失している。その結果、室町末期には五山寺院といえどもかつての面影はなく、多くの寺院で法堂と仏殿を兼用していたようで、相国寺はもちろん南禅寺や天龍寺でも応仁の乱以降仏殿は建てられていない。

室町後期から近世初期にかけての五山寺院における法堂もしくは仏殿の状況をわずかな記録から類推すると、天龍寺法堂は慶長三年(1598)七月二十六日に上棟する⁷²。元治元年(1864)薩摩藩の兵士によって焼かれてしまい現存していないが⁷³、その大体の大きさは先の「見分間数改帳」によって判明している。「六間×六間 四方廂一・五間宛」と、秀頼再建の相国寺法堂や南禅寺法堂に比べてかなり規模が小さく、正方形平面であったことがわかる。この時期の東福寺を除く京五山及び大徳寺・妙心寺では、いずれも法堂と仏殿が兼用されている。建仁寺は東福寺の茶堂を移築したものであるが、文明十一年(1479)上棟の大徳寺法堂は東西六間半南北五間⁷⁴、文明十一年に着手された南禅寺法堂は慶長再建時よりも規模が小さく⁷⁵、天正十一年(1583)以前に建てられた妙心寺法堂(兼仏殿)は八間五尺四方と天龍寺と同程度の規模であった⁷⁶。慶長再建以前の相国寺法堂も亀泉集證が「仮法堂一字有之」と言っていることから不十分なものであったに違いない。秀頼の建てた相国寺法堂が、そのころ未だ威容を誇っていた東福寺法堂には及ばないものの、それまでの法堂兼仏殿よりも如何に規模の大きなものであったかがうかがえる。

まず、立断面について検討すると、相国寺以降の法堂は一重裳階付、内部は身舎部分が全面鏡天井となっている。慶長三年に建てられた天龍寺法堂は「四方廂」と記されているが、『都名所図会』⁷⁷をみると裳階付となっている。そして、亀泉集證が「仮法堂」と呼んだ文明十年上棟の相国寺法堂は「雨打」があり裳階付であった⁷⁸。また天正十一年(1583)以前の妙心寺法堂(兼仏殿)も「見分間数改帳」によると裳階付である。一方『匠明』堂記集の「法堂之図」は単層となっている。ただ、「法堂之図」と記した隣に「同徒仏殿共云り」とあり、仏殿と法堂の共用が広く行なわれていたことをうかがわせる。『愚子見記』社頭伽藍には中国では仏殿・法堂ともに裳階付とするが、日本においては寺や施主の経済力によって単層にするか裳階付にするかの定めは無いとしている。

現存する中世の仏殿の多くが一重裳階付であり、五山仏殿に準じる規模の不動院金堂も一重裳階付であることを考えると、室町後期に仏殿と兼用する中で、法堂も一重裳階付に変化していったと考えられることは可能であろう。

内部天井に関しては、相国寺以前の法堂については全く史料がなく、『匠明』も『愚子見記』も言及していない。時代の下る『諸堂社絵図』(宝永四年(1707)～寛延元年(1748)頃成立、大谷出雲基

矩著)になると、法堂は正面五間で妻側が四間のものと五間のものがあるが、いずれも一重で、底部分は化粧屋根裏、身舎部分は全面鏡天井となっている。中世に法堂内部の天井がどのようなになっていたかは不明であるが、少なくとも重層であった時期には身舎は全面に天井が張られていたことは間違いなく、相国寺以降の法堂もその伝統を受け継ぐものとも考えられる。しかし、そう考えると寛文五年(1665)の大徳寺仏殿、文政十年(1827)の妙心寺仏殿が身舎部分を全面鏡天井とすることに説明がつかず、鏡天井は時代的な傾向であるとも考えられる⁷⁹。さらには、寛文九年(1669)の泉涌寺仏殿や承応元年(1652)の南宗寺仏殿が中央方一間鏡天井と中世仏殿に近い形をとることを考えると、その他の要因も考えなければならないが、現時点では検討の材料が不足しているのは否めない。

次に、平面について検討すると、相国寺以降の近世の法堂と中世の法堂の大きな違いとして、梁間が三間から四間になり奥行が深くなることがあげられているが⁸⁰、実際は柱間が小さくなるので身舎奥行としてはそれほどの変化はない。中世の法堂の平面が判明しているのは建長寺、東福寺、天龍寺であるが、建長寺と東福寺は来迎柱が身舎柱筋にあることがわかっているが、天龍寺は法座位置が判明していないので身舎柱の梁間方向の長さを記すと、建長寺四丈二尺、東福寺四丈八尺六寸、天龍寺四丈七尺である。一方現存する近世の法堂の前面身舎柱から来迎柱までの奥行は相国寺四丈四尺二寸、大徳寺三丈九尺四寸、妙心寺四丈六尺一寸であり、中世の法堂と大きな差はないことがわかる。それよりも、近世の法堂と中世の法堂の大きな違いは、桁行は五間と変わらないので柱間が小さくなった分、身舎桁行方向がずいぶんと狭くなったことである。

法堂における最も重要な法会である住持の上堂説法や頭首の乗仏の際、大衆は雁行側立、即ち東西に分かれ相対して整列して聴聞するが⁸¹、義満期の相国寺には 800 人に及ぶ僧衆がいたが、応仁の乱後は 200 人になったという⁸²。近世に入るとさらに大衆は減り、慶長二年には沙喝を含めて 110 人であった⁸³。大衆の減少によって東西に大きな空間が必要ではなくなったのである。また、上堂や乗仏の時には座前問訊⁸⁴を行うが、これは法座前、法堂正面の入側柱で行う。これ以外にも法座前方の空間を使用し、問禪や乗仏などの法会を行う際にはこの前方の空間は非常に重要であった⁸⁵。亀泉集證が「仮法堂」と称していたのは、法堂が小さくて十分な法儀が行えなかったからではないか。そして、この慶長造営では梁間方向を四間にして正面から法座までの奥行を深くすることによって、法儀の執行に十分な内部空間を取り戻し、なおかつ大衆が減少して必要のなくなった東西の空間を省いたのである。これによってかなり造営費用の削減が可能になったに違いない。つまり慶長十年造営の相国寺法堂の建築史的意義は、結果的に機能的でなおかつ経済的な法堂を作り出したことにあるといえる。

おわりに

秀頼の相国寺法堂の再建は材木不足と建築経営に悩みながらも 1 年で竣工し、法堂はその後の法堂建築の規範ともなった。それは桁行五間梁間四間という平面が機能的であり経済的であったからであろう。しかし、一重裳階付・身舎全面鏡天井という立断面は『匠明』をはじめとする木割書にはなく、どうしてそのような形式が採用されたのかは明らかではない。豊臣側大工が立案したと考えると、

機能的な理由からではなく構造的問題、または意匠的問題などが予想される。特に、一重裳階付に関しては経済的な問題と意匠的な問題があったのではないかと考えられる。というのも秀吉は天瑞寺と祥雲寺という二つの禅宗寺院を作ったが、天瑞寺は大徳寺内の塔頭ということで客殿のみであったようだが⁶⁶、祥雲寺の法堂は重閣で二階があったことが判明している⁸⁷。やはり当時でも法堂建築の理想は二階堂だったのではないか。しかし、秀頼は摂河泉五十二万石の一大名となっていた上に、数多くの寺社造営を行っていたため、経済的な理由から一重にせざるをえなかった。それでも東福寺のように全くの単層よりも立派な外観となる裳階付を選択したのではないだろうか。

一方、身舎を全面鏡天井とすることについては現時点では不明な部分が多く、今後の課題としたい。

註

¹『重要文化財相国寺本堂（法堂）・附玄関廊修理工事報告書』京都府教育委員会 1997 年

²拙稿「豊臣秀頼の寺社造営について」（日本建築学会計画系論文集 第 499 号 1997 年）なおその後の調査によって山城では相国寺鐘樓、宝積寺、禅林寺本堂、由岐神社本殿、その他の地方で産田神社仁王門、王布良天王社、多賀大社を造営していることが判明した。さらに慶長五年には三十三間堂を修理している。それらを含めると秀頼による寺社・橋梁の造営数は 96 件となる。

³中世禅宗寺院に関しては先学による数多くの優れた論考がある。本稿で参考にしたものだけでも横山秀哉氏の『禅宗伽藍殿堂の研究』（1958 年）、太田博太郎氏の『日本建築史論集Ⅲ 社寺建築の研究』（岩波書店 1986 年）、川上貢氏の『禅院の建築』（河原書店 1968 年）、「中世の寺院建築（禅宗様）」（『文化財講座 日本の建築 3 中世Ⅱ』第一法規出版株式会社 1977 年）、「三聖寺伽藍古図について」「古絵図にみる禅寺の建築」（『建築指図を読む』中央公論美術出版 1988 年）、『日本建築史論考』（中央公論美術出版 1998 年）、関口欣也氏の一連の「中世禅宗様建築の研究」（日本建築学会論文報告集第 110 号、第 111 号、第 115 号、第 116 号、第 118 号、第 119 号、第 121 号、第 123 号、第 128 号、第 129 号、第 149 号、第 150～153 号）、永井規男氏の「中世五山における庫院とその変容」（建築史学第 38 号 2002 年）などがある。

⁴以下、創建時と 2 度目の応永年間の造営に関しては「相国考記」上による。（『相国寺史料』第 1 巻 思文閣出版 1984 年）

⁵明徳二年四月の落慶法要時の記述に「提綱云、吾大壇越創建本寺、八用寒暑、殿堂已曉、最為後経営法堂、纔經数月、棟宇亦輪奐」とあり、最後に法堂が竣工したと思われる。七重大塔は総供養の後、明徳四年に立柱が行われている。〔「相国考記」上（『相国寺史料』第 1 巻 思文閣出版 1984 年）〕

⁶「空華日用工夫略集」永徳三年十一月二十六日の条に「仏殿・法堂二基立柱上棟同時也」とあるが、その仏殿が竣工した記述はない。そして至徳元年二月二十五日に「君曰、姑俟仏殿落成云々」、三月十六日に「相国仏殿立柱之会（略）」とある。また、至徳二年十一月には「三聖新像」を仏殿（覚雄宝殿）に安置している。

⁷ただし、七重大塔は応永七年(1400)に雷によって焼失した後は、鹿苑寺に移された。しかし、それも応永二十三年(1416)に再び雷火で焼亡する。（『看聞御記』応永二十三年正月九日の条）

⁸ 応永八年四月十四日に新法座で、住持による慶讃上堂が行われている。

⁹『看聞御記』応永三十二年八月十五日の条に「聞、相国寺炎上所者、寺中七堂塔頭鹿苑院、雲頂院、乾徳院（乾徳院）、常徳院、玉龍院、鎮守社等払地炎上。」とある。

¹⁰「冬節諸頭首兼弘、以輪蔵為法堂」〔「相国考記 上」（『相国寺史料』第 1 巻 思文閣出版 1984 年）〕。また『看聞御記』応永三十二年八月十五日の条にも「残所者輪蔵、大塔、崇寿院、大智院、大徳院、勝定院、慧林院、大幢院八ヶ所残了」とある。

¹¹『看聞御記』応永三十二年十一月三日の条「聞、今日辰一点相国寺仏殿立柱云々」。竣工した時期は明らかではないが、『看聞御記』にはこのあと永享八年三月七日の条に相国寺仏殿の棟木に書かれた鹿苑院の名字の記事があり、『蔭涼軒日録』永享八年三月十二日の条に仏殿に脇侍を安置する記事があるので、永享八年(1436)には仏殿が完成していたことは間違いない。

¹²『蔭涼軒日録』に造営経過が詳しいが、三門の彩色のため洛中の絵師に扇絵を提出させている。その結果土蔵に決定するのだが、土蔵は仏画や肖像画なども描く職業絵師であり、おそらく、東福寺三門上層内部のような彩色が施されたのであろう。

¹³『相国考記 中』（『相国寺史料』第 1 巻 思文閣出版 1984 年）

¹⁴『相国考記 中』（『相国寺史料』第 1 巻 思文閣出版 1984 年）

¹⁵『実隆公記』文明十一年九月二十九日の条

¹⁶『補庵京華新集』（玉村竹二編『五山文学新集』第 1 巻 東京大学出版会 1967 年）

¹⁷『補庵京華新集』天竜寺前住春溪倭賛に「掌蔵論而兼弘於無畏堂」とあり、文明十三年の時点で法堂は「無畏堂」と呼ばれていたことがわかる。

¹⁸『蔭涼軒日録』文明十七年四月二十七日の条。

¹⁹応仁の乱以降『蔭涼軒日録』『鹿苑日録』に、それまであった三門での施餓鬼や懺法、祈禱などの記事が全く見られなくなる。

²⁰『蔭涼軒日録』延徳二年正月二十三日の条。また「又曰、乱後諸五山皆廢壊否。愚云。皆廢壊。就中相国寺第一之廢壊也。」とも記され、応仁の乱での惨状がうかがえる。

²¹『公卿補任』に「天文二十年辛亥・・七月十四日相国寺放火乱妨等。」とある。また『史料総覧』巻十「天文二十年七月十四日細川晴元の武将三好正勝及び香西元成等、丹波より京都に入り、相国寺に陣す、是日、三好長慶の武将松永久秀等、攻めて、之を敗走せしむ」とある。

²²『鹿苑日録』には永禄・天正・文禄年間を通して法堂の記事が多数認められる。

²³『鹿苑日録』に、建仁寺と南禅寺に宛てた永禄三年付の法堂寄付受取の文案が掲載されている。

²⁴『参暇寮日記』天明八年二月の条（維明周奎筆録）

天明八年正月晦日、寅之半刻、河東新道失火、丑寅ノ風強ク、卯之上刻、河西へ飛、自是列風猛火、時々変化、西西北延焼、丑之刻ヨリ、禁中炎上、（上下段内行幸、寺内大勢騒動、三付、電報院前、終高取電報）翌朔日、寅半刻、当山鹿苑へ移り、総門、山門、方丈、庫裡、侍真寮、祖塔、宝塔、毘沙門堂、鐘樓并山中二ヶ院、至于辰刻為灰燼、此日至于申刻、鞍馬口安居院辺野へ焼盡而、火始而滅ス、西へ限千本ヲ、南至七条、為一望焦土、

とかなりの大火であったようである。

²⁵天明八年(1788)の相国寺末寺帳によると塔頭 48、十利 3、末寺 71、孫末寺 4 を有しているが、一方ではこの時すでに 49 塔頭、1 諸山、12 末寺、7 孫末寺の計 69 カ寺に及ぶ敗壞寺院があったことが報告されている。（『国史大辞典七』相国寺の項 吉川弘文館 1986 年）

²⁶狩野永納撰『本朝画史』延宝四年(1676)頃成立、元禄四年(1691)刊行（笠井昌昭他訳注『訳注本朝画史』同朋舎出版 1985 年）

²⁷『京都府の近世社寺建築』（京都府教育委員会 1983 年）では仏殿としているが、小出祐子「明和二年における建仁寺法堂再建と境内の開発について」（日本建築学会計画系論文集 第 543 号 2001 年）によると建築当時は主に法堂と呼称されていたので、本稿では法堂として扱う。

²⁸川上貢「東福寺の伽藍と塔頭」（『日本建築史論考』第二編五 中央公論美術出版 1998 年）

²⁹ 前掲註 26

³⁰辻善之助『日本仏教史 近世編之一』岩波書店 1952 年

³¹『鹿苑日録』天正十七年三月二十九日「民部卿法印寺中破壊之寺一匝」

³²高野山文書 360、豊臣秀次朱印状（『大日本史料 家わけ第一 高野山文書之二』続室簡集 38）

それどころか材木の徴発を行なっており『鹿苑日録』文禄元年九月二十一

- 日の条に
大工来。午時自民法有使。於寺中大材木求置。又新伽藍建立之用意在之否。即以能智寺中江触之。
- とあり、又翌日には
蓋材木之一件、即以一書呈玄印法印。書曰、於寺中材木大物之柱等過分に無之云々。
- また『鹿苑日録』文禄二年正月十一日の裏文書に、
寺中材木之儀。蒙仰候。則寺中相触候。伽藍建立仕儀無之候。其外大物之柱以下過分に用意申儀無御座候者也。
- という文禄元年九月二十一日に前田玄以（民部卿法印）にあてた文案がある。
- ³³『鹿苑日録』慶長九年十一月十三日、十四日の条
- ³⁴『鹿苑日録』慶長十年十月八日の条
- ³⁵『晴富宿禰記』文明十一年八月五日の条「南禅寺法堂今日事始云々」。なお、応仁の乱で焼失するまでの南禅寺伽藍に関しては太田博太郎『社寺建築の研究』（『日本建築史論集Ⅲ』岩波書店 1986 年）五山の建築・六、南禅寺に詳しい。
- ³⁶桜井景雄『南禅寺史』上 法蔵館 1977 年
- ³⁷『南禅寺文書』中巻 333、335 片桐貞隆書状
- ³⁸『鹿苑日録』慶長十一年七月五日の条
- ³⁹『鹿苑日録』慶長十一年二月十五日の条
- ⁴⁰『参暇寮日記』天明八年二月の条
- ⁴¹『本光国師日記』寛永五年二月朔日「十九日より古山門こわし候」
- ⁴²『南禅寺文書 下巻』407 藤堂高虎書状、『本光国師日記』寛永五年五月十六日の条
- ⁴³『本光国師日記』寛永五年九月十五日の条
- ⁴⁴太田博太郎『日本建築史論集Ⅲ 社寺建築の研究』（岩波書店 1986 年）五山の建築 七、天竜寺
なおこの法堂は、元治元年(1864)に兵火によって焼失している。
- ⁴⁵安国寺恵瓊は慶長三年十月東福寺に住し、慶長五年の関が原合戦のあと刑死しているため、移築は慶長三年から五年の間である。（辻善之助『日本仏教史 近世篇之一』岩波書店 1952 年）
- ⁴⁶川上貢『日本建築史論考』（中央公論美術出版 1998 年）第 2 編 寺院建築の研究 5. 東福寺の伽藍と塔頭
- ⁴⁷寛永度大猷院様御上洛日記写（『相国寺史料 第 2 巻 相国寺史料 2』思文閣出版 1986 年）
- ⁴⁸『南禅寺文書 中巻』339 片桐且元書状
- ⁴⁹前掲註 2
- ⁵⁰『義演准后日記』（『大日本史料』慶長十年十一月十七日）
- ⁵¹『義演准后日記』慶長十年九月十六日の条（『大日本史料』慶長十年十一月十七日）
- ⁵²「西笑和尚文案」（『大日本史料』慶長十一年二月十五日）
- ⁵³「良長老、竹西堂へ一紙二書状遣ス、南禅寺之山門、藤堂和泉殿可有建立由ニ候故、」（『本光国師日記』寛永三年四月二日の条）
- ⁵⁴『南禅寺文書 下巻』404 藤堂高虎書状
- ⁵⁵『南禅寺文書 下巻』405 藤堂高虎書状
- ⁵⁶川上貢『日本建築史論考』（中央公論美術出版 1998 年）第 2 編 寺院建築の研究 5. 東福寺の伽藍と塔頭
- ⁵⁷慶長十四年ごろまでには徳川氏による豊臣包囲網が完成していたという。（藤田達生「徳川將軍の創出」年報中世史研究 25 号 2000 年）
- ⁵⁸慶長十三年頃から秀頼は大仏殿再興のため、各地から材木を集めている（『大日本史料』慶長十四年正月是月）。慶長十五年六月十二日には新始、八月二十二日には立柱を行っているためその頃には材木がある程度集まっていたのだろう（『大日本史料』慶長十五年六月十二日）。
- ⁵⁹拙稿「豊臣秀頼の作事体制について」（日本建築学会計画系論文集 第 511 号 1998 年）
- ⁶⁰『南禅寺文書 中巻』340 片桐且元書状、341、342 文殊院勢譽書状
- ⁶¹慶長三年(1597)の醍醐寺下伽藍作事では伽藍は木食応其、門跡寝殿は増田長盛がそれぞれ作事奉行となっている（『義演准后日記』慶長三年二月二十三日の条）。事績からみても応其は寺社建築の造営のみを担当したと考えられる。

- ⁶²『新建築学体系 44 建築生産システム』彰国社 1982 年
- ⁶³関が原合戦のあと家康は行人の勢書に其のあとを相続させ、高野一山の支配をさせようとするが、学侶方より不満が噴出し、慶長六年(1601)京都に出て訴訟を起こした。この学侶方と行人方の争いは十七世紀末まで続く。（宮坂有勝・佐藤任『新版高野山史』心交社 1984 年）
- ⁶⁴応其の隠遁は中世後半から起こってきた十穀型による社寺造営の終焉といえる。座を解体したのは紛れもなく織豊政権であり、十穀型の活動は建築生産を既存の体制から解放つ機運を作り出し、秀吉と木食応其による数多くの造営はその帰結点であった。しかし、秀吉も秀頼も寺社大工や禁裏大工などを再編成したわけではなく、併存していたに過ぎなかった。そういう意味では城普請において近世的であったとしても、秀吉の寺社造営における作事組織は過渡的なものであった。集権的で整備された作事組織は町大工・間閥大工・新興大工などあらゆる大工の再編成を進め、一元化した中井正清のもとに成立したのである。
- ⁶⁵前掲註 59
- ⁶⁶『義演准后日記』慶長十年十一月九日の条（『大日本史料』慶長十一年六月二四日）
- ⁶⁷墨書の判読は神戸大学助手森田竜雄氏（日本中世史）のお世話になった。
- ⁶⁸『高野山文書』（『大日本古文書』家わけ第一）491 諸寺諸社造営目録
- ⁶⁹拙稿「豊臣秀頼の作事体制について」（日本建築学会計画系論文集 第 511 号 1998 年）
- ⁷⁰『北野社家日記』慶長十二年七月二十六日の条
- ⁷¹太田博太郎『日本建築史論集Ⅲ 社寺建築の研究』五山の建築 三、東福寺 四、建仁寺（岩波書店 1986 年）
- ⁷²法堂がなかったわけではなく、応仁の乱の後に建てられた法堂が存在したことは『鹿苑日録』天正十七年八月晦日の条の入院上堂の記事よりわかる。
- ⁷³白石虎月編『東福寺誌』思文閣出版 1930 年初版 1979 年復刻
- ⁷⁴京都府教育委員会『重要文化財大徳寺経蔵及び法堂・本堂（仏殿）修理工事報告書』1982 年
- ⁷⁵桜井景雄『南禅寺史』下 法蔵館 1977 年
- ⁷⁶無著道忠『正法山誌』東林院 1935 年初版・思文閣 1975 年復刻
- ⁷⁷秋里離島著 安永九年(1780)年刊
- ⁷⁸『蔭涼軒日録』文明十九年四月十三日の条
- ⁷⁹大森健二『社寺建築の技術—中世を主とした歴史・技法・意匠—』（理工学社 1998 年）は「複雑な構成より平明な架構が好まれてきた」という。
- ⁸⁰関口欣也「中世禅宗様仏堂の平面(Ⅰ)」日本建築学会論文報告集第 110 号 1965 年
- ⁸¹「重雕補註禅苑清規」第二巻 上堂(前田慧雲編『大日本統蔵経』第 1 号 第 2 編 第 16 套第 5 冊)
- ⁸²竹貫元勝「概説 日本禅宗史(四)」『禅文化』125 号 1987 年
- ⁸³『鹿苑日録』慶長二年五月十二日の条に「則到沙喝、大衆百十人在之」、同じく十九日の条に「予引行道、大衆百二十余、当寺之衆凡至沙喝百人」とある。
- ⁸⁴「座前者謂法堂正面撐天柱之間也。按上堂凡有兩次座前問訊」（無著道忠『禅林象器箋』禮則門 誠信書房 1963 年）なお、撐天柱とは「凡殿堂正面左右二露柱」（無著道忠『禅林象器箋』殿堂門）
- ⁸⁵『鹿苑日録』の鳳林承章の乗弘記である「日用集」に「頭首之寮長乗弘之中、法堂正面東之柱ノ前ニ立也」などとある。
- ⁸⁶『鹿苑日録』文禄元年八月十三日の条、天瑞寺殿の法要が営まれ、五山、大徳寺、妙心寺の僧が参列し大衆の数が 700 人であったというから、相当大的な客殿であったと思われる。
- ⁸⁷林田光禪編『智積院誌』（総本山智積院 1915 年）第五編 五、堂社伽藍記

(2002 年 9 月 24 日原稿受理、2003 年 3 月 12 日採用決定)